



## 「ものづくり 人づくり 夢づくり ～下総高校の取組」

ながの やすき  
県立下総高等学校校長 長野 泰紀



### 1 はじめに

本校は成田市にある、園芸科（農業）・自動車科（工業）・情報処理科（商業）の3つの学科を持つ専門高校である。西暦1900年に地元の方々の努力で設立された小御門農学校がその濫觴である。専門教育により、長く農業をはじめ、地域産業を支える人材を輩出してきた。成田市の北東部に位置するため、香取市方面から通ってくる生徒も多い。また、千葉市や柏市、船橋市など遠方から通ってくる生徒もいる。

### 2 職業教育の充実～地域社会を支える職業人の育成

表題にあげた、「ものづくり 人づくり 夢づくり」は本校のスクールモットーである。働く力を身につけた持続可能な地域社会を支える職業人の育成を学校教育目標の一つに掲げている。

授業中の様子を見ようと、私はほぼ毎日校内を巡回している。教室で生徒たちは、はじめに授業を受けている。農場で実習中の生徒は実に一所懸命に取り組んでいる。「これは何？」と聞くと作物の特長を教えてくれる。自動車科棟では、これまた熱心に自動車の部品と格闘している。情報処理科の授業でも、パソコンを前にそれこそ「全集中」である。

専門学科の授業では、以前から自分たちで課題を見つけ、話し合い、調べ、解決策を探り、さらに成果を発表するなど、これからの社会で必要とされる力を伸ばしている。

授業の半分近くを専門学科が占めており、高校からの0スタートとなる学習がほとんどなので、素直に、真剣に取り組んで、思いのほか力を伸ばす生徒も少なくない。資格取得も奨励しているが、一人で17の資格を取得した生徒がいて驚いた。3学科あるので、例えば園芸科の生徒が工業関係の資格を取るなど、学科を超えた資格取得も多い。

本校は文科省指定の農業経営者育成高校でもあり、園芸科1年生は寮で一定期間共同生活を行うことで、多くのことを学んでいる。

職員は学習面にしても、生活面にしても、実に丁寧な生徒のことを見ている。困難を抱えた生徒も少なくないが、一人の職員が抱えず、チームで対応することを基本にしている。継続的なキャリアガイダンスを重ねて、この3月の卒業生の進路決定率は99%となった。農業クラブでは、意見発表の部で昨年度は全国大会に、今年度は関東大会に進んだ生徒がいた。自動車部はエコカーレースでワンツーフィニッシュを飾り、コロナで大会中止の前からの通算で全国優勝7連覇となった。

### 3 風通しの良い職場づくり

教職員の長時間勤務は社会問題となって久しい。ストレスで心身を病んでしまう例も多く聞く。学校ではマルチタスクで多くの仕事をこなさなければならない現状がある。

一方で、自分の後ろには誰かがついていて、一緒にやってくれる仲間がいる、となると、気持ちはずいぶん楽になる。実際、困難と思



トウモロコシの育成調査をする園芸科生徒

われることでも、みんなで力を合わせれば乗り越えられないことはそんなにはない。

職員には、年度初めに「生徒のためになることなら、思いっきりやってほしい。責任は私がとる。ただし、教頭先生には相談してほしい。」と話している。職員には自信をもって仕事に取り組んでほしい、という思いからだ。

また、国の動向から、地域の情報まで、可能な限り職員に話すようにしている。方向性を示した上で「先生はどう思う？」と意見を聞くこともよくある。職員はみな、本当に一所懸命に取り組んでくれている。感謝しかない。職員が自分たちで考え、意思決定に関わることで、モチベーションやストレスの度合いも変わってくる。ストレスチェックの団体としての数値は、ここ数年70台と良好である。校内を歩いていると、職員から新たな提案を受けることも少なくない。もっとも、私が安穩としていられるのも、教頭がうまく裁いてくれているからなのである。

#### 4 コミュニティ・スクールの制度の導入

私は多古高校の教頭として、学校運営協議会に関わったときに、地域の方々に生徒たちが声をかけられ、自己有用感を高めていく様子や、生徒が地域に出ることで地域がより元気になっていく姿を目の当たりにした。そこ

で、校長として本校に赴任した令和3年度に、職員にコミュニティ・スクール導入の意義を説明して、理解を得て、秋には県の生涯学習課に相談して、同4年度からの制度の導入を決めた。

走りながら体制を整える感じがあったが、初年度から、地元商業施設での3学科合同イベントの開催で、新たに生徒が地域に出る機会をつくってもらった。中学校訪問で使える学校宣伝用チラシもつくってもらい、大いに助かった。チラシの作成は、委員の方々が構成から編集までやってくださり、職員がしたことは生徒への執筆依頼の連絡くらいだった。委員の紹介で、成田国際空港株式会社から伐採木のチップをもらって、園芸科の野菜づくりに利用する研究を進めている。進路の就職面接練習では、委員の方々にも面接官になってもらった。長年会社経営や短大、専門学校の学生の指導に携わっている方々の指導なので、実にありがたい。また、昨年度、委員長名で人事に関する意見具申を出してくれたことで、県教育委員会の理解を得て、今年度は懸案事項が解決している。

私は今年度末で役職定年を迎えるが、私が本校を去った後も、学校運営協議会の委員のみなさまが、本校職員や保護者と手を携え、本校が地域とともに歩んでいく取組を、今後とも進めていってくださるはずである。

#### 5 おわりに

生徒たちには、機会あるごとに、「自分を大切にすること、周りの人を大切にすること、物事を最後までやり切ることを実践してほしい」と伝えている。生徒たちが、本校で学んだ力で人生を切り拓き、幸せな生涯を送ってもらうとともに、自分にできることで社会に貢献してほしい、と願うばかりである。



## 学校をアップデートする ～「つながり」を意識した 教頭の役割を通して～

八街市立八街中学校教頭 さかきばら 榊原 がく 岳



### 1 はじめに

本校は、「未来への道を切り拓くことのできる生徒の育成」を学校教育目標に掲げ、「生徒が主役の学校づくり」に取り組んでいる。全国的な少子化の流れの中で、本校の生徒数も減少傾向にはあるが、地域や保護者の学校に対する関心は高く、本校の教育実践にも非常に協力的である。

本校が位置する八街市は、平成9年度より、全国に先駆けて「幼小中高連携教育」を推進し、「学校改善」「14年間を通じた継続指導」「家庭や地域との連携」を3本柱に、それぞれの校種をつながりを活かして「生きる力」の育成を目指している。

教頭として、校長が目指す学校像と八街市の教育施策の理解に加え、今日的な教育課題に対しても鋭敏な目を持つことが必要であると考えている。特に、教育機器のICT化、GIGAスクール構想の推進、生成AIの台頭など、次世代の教育環境や人材育成を俯瞰した先進的なビジョンを持つことが重要である。教頭として着任後、これらの課題に対して、学校をアップデートすることを目的として、「つながり」をキーワードとした幾つかの実践を行ってきた。これらの取組は「生きる力」の醸成に効果的に働くものと考えている。

### 2 学校をアップデートする「つながり」

#### (1)学校と地域をつなぐ

コロナ禍において、保護者や地域との連携は困難を極めた。しかし、GIGAスクール構

想の急速な推進に伴い、一人一台PC端末の時代が到来した。本校では、コロナ禍においても、PC端末の持ち帰りをいち早く実施し、オンライン授業に取り組むなど先進的な取り組みに着手してきた。このような経験を活かし、令和4年度からは、保護者や地域住民に対して、体育祭や合唱コンクールのオンライン配信をスタートした。また、令和5年度からは、これらの学校行事に加え、連携教育を目的とした小中合同児童生徒集会を地域にオンラインを通じて公開するなど、インターネットを情報配信の重要なアイテムとして積極的に活用している。教頭として、学区の小学校や地域有識者と連携し、効果的な配信を計画したり、地域の声を配信方法に活かしたりするなどの役目を果たしている。これらの取組は、中1ギャップの解消や教員の指導技術やモチベーションの向上にも効果的に働いている。

#### (2)生徒と社会をつなぐ

教頭としての役割の一つに、次代のための教育的トピックを見極め、生徒や教職員に伝達していくことがあると考えている。地域や外部との窓口役である教頭として、地域や次代を支える職業人を学校に招聘し、そのキャリアを活かした授業実践を企画することは、生徒のみならず教職員にとっても有益な経験になると考えられる。

令和4年度は外部講師を招いた2回のキャリア教育授業を行った。第1回目は、知り合いの産業医を講師に招聘した「がん教育」授

業である。がん教育は比較的新しい教育トピックではある。しかし、実践を通じて、生徒は最新の治療や予防医学の理解を深めるだけでなく、がんという病から見えてくる人間の尊厳や生き方にまで考えを広げることができた。がんという難しいトピックについて、医師、教頭、学年職員と何度もディスカッションを重ね、対話的な授業を作り上げることができた。



対話形式で実施されたがん教育授業

第2回目の実践は、動画クリエイターを講師として招いた「職業人に聞く」授業である。生徒たちにとって、動画クリエイターは今や憧れの職業でもある。講師探しは難航したが、指導主事時代の人脈を活用し依頼することができた。当日は、活発な質疑応答が飛び交うワークショップ型の授業となった。動画の制作方法、動画が及ぼす経済的効果、デジタルシチズンシップの大切さ、クリエイターとは何かなど、外部講師ならではの話の切り口は、非常に興味深く、生徒の知的興奮や熱気が大いに伝わる授業となった。

いずれも教頭として積極的に授業づくりに関わった事例である。生徒と社会をつなぐ上で、教頭の視線は移りゆく社会情勢にもしっかりと目を向けていくべきである。

### (3)PTA活動を次代につなぐ

令和5年度、PTA活動を一新した。コロナによる世相や働き方の変化により、これまでのPTAの在り方を見直す必要に迫られていたからである。令和4年度のPTA役員と協議を重ね、PTA文書のペーパーレス化とSNS化、本部・役員会議の精選、役職の削減など、これからの時代にふさわしい継続可能なPTA活動を目指した内容となった。これまでは、一部の役員の方たちにPTA活動の負担が集中していたが、このような改革により、誰もが無理なく参加できる体制を整えることができた。

教頭の業務において、PTA活動を企画運営することは、学校を支える上でも、保護者との連携においても非常に重要かつ意義深いことである。教頭は、PTA活動を単純にスリム化するだけをゴールにするのではなく、時代の流れに適した最も適切な活動や連携の在り方を模索していく先頭に立つべきであることを実感している。

## 3 おわりに

学校を支える視点において、生成AIの台頭にも注目している。単なる文章作成、要約、翻訳、画像生成、プログラミング、未来予測などは、生成AIが簡単に回答を提案してくれる時代である。これからの学校教育が担うべきことは、人間だけが持つ主体性、道徳性、創造性などを大いに育むことであろう。そしてそれは非常に価値ある仕事であるはずだ。教頭が一人だけで学校を支えることなど到底できることではない。未来を見据え、これからも人や次代との「つながり」を意識して職責を果たしていきたい。



# 家庭科の魅力とは ～生徒の力を最大限に引き出す工夫を～



松戸市立第一中学校教諭 ふなさこ 船迫 ちはる 千春

## 1 はじめに

本校は松戸駅東側の閑静な高台に位置する。広大な校庭は、旧陸軍工兵学校跡地の一部で、周辺には小学校、裁判所、法務局、公務員宿舎、大学、松戸市中央公園などがある。保護者は本校卒業者が多い反面、全国各地からの転入も多数あり、学校への関心も高く協力的である。学級数は特別支援学級も含め30学級で868名の生徒が在籍する大規模校である。また、中学校夜間学級（夜間中学）「みらい分校」の設置校である。

## 2 家庭科教諭として学校での立ち位置

私はこの「松戸でいちばんいい学校をめざして」という言葉が大好きである。いい学校とは何か。生徒たちが毎日の学校生活で目をキラキラさせる場面や体験することを増やすことで「一中に通って良かった!」と大人になって振り返ることができる気持ちを育てていくことが大事なのではないかと考えている。では、家庭科教諭として生徒たちに一体何ができるのか。

私自身、結婚し娘を妊娠した時に感じたことは「中学校で学んだ内容が、大人になって

役立つことが何一つ、思い出せない。一体私は何を学んでいたのだろう。」という気持ちであった。そして、それと同時に“生徒たちが一人で社会に出ても中学校で学んだ知識を少しでも思い出し、生きていけるような授業をしよう!”と実生活で強く思うことができた。

教員になりたての頃、先輩教諭が名前のあまり知られていないコンクールに応募し、生徒たちが数多くの賞を受賞し、日々表彰されていた。私が尊敬の気持ちを先輩教諭に伝えたところ「どんな、些細な大会（取組）でも、生徒たちが表彰されて、輝ける場面を沢山作ってあげるの。教師としての努力も必要だよ。」と言われたことが強く胸に響いた。また、ベテランの家庭科教諭が「生徒一人一人の特徴をよく見て、この子は短期間に作品を仕上げる子か、じっくり取り組む子か見極めるの。その子に合った作品展やコンクールに臨ませてあげなさい。その代わりに、その作品展やコンクールで、生徒が恥をかかないように、徹底的に教師が綿密に計画を立てるのよ。」という目からウロコが落ちる知恵を頂いた。その二人の先生方を目標に、人生で一番大事なのは家庭科で学んだ内容であると感じられるように、「松戸でいちばんいい学校をめざして」が達成できるように、そして「一中で一番楽しかった授業は家庭科だった。」と思ってもらえるように、生徒たちに沢山の体験をさせてあげよう。これが私の家庭科教諭としての目標である。



### 3 家庭科の授業構想

3年間の家庭科をストーリー仕立てにし授業展開している。作品やワークシートはすべて、家庭科室で保管し3年生の最後の授業で「タイムカプセル」と称した封筒に3年間学んだ作品とワークシート、教科書ファイルをすべて入れて封をして持ち帰らせている。封筒の宛名には【大人になったら開けること】と文字を印刷し、「あなた達が大人になって、必要になるときが来たら、この封筒の封を開けなさい。きっと、その時に必要な情報や知識がこの中に沢山詰まっているから。」と最後の言葉を話して授業を終えている。その封筒の中には【フェルトで作った子供のおもちゃお弁当箱、家族を持ったと想定して住みたい家の間取り、子供が誕生したと想定しての名づけ用紙、未来の子供に披露するあやとり&お手玉、チラシで作った食品群表、太巻きデザイン画、中学生レシピコンテスト応募用紙、手作り絵本etc…】中学生で学ぶ内容はどれも自立した時に必要なものである。少しでも生徒たちが中学生の思い出を振り返り、家庭科を思い出してくれたら幸せなことである、と思いながら毎日授業準備するのが楽しみである。

### 4 作品展・コンクールへの積極的な参加

家庭科では様々な作品展・コンクールがあり、一つ一つの参加条件を見て、授業に組み込み、みんなで参加できないものかといつも思案している。以下のコンクールは実際に授業に組み込みながら応募しているものである。

#### (1)太巻き寿司デザインコンテスト

千葉県の郷土料理を学びながら、様々な色を表現するためにどの食材や味付けをすればよいのか提案し、取り組み、応募している。

#### (2)中学生レシピコンテスト

長期休みの課題として家庭で取り組み、レポート提出後、応募している。家庭と学校で連携しながらの取組で、普段自分から料理をしない生徒が家庭で相談しながら作成している。

#### (3)家やまち住まいの絵本コンクール

3年生の夏休みの課題として毎年取り組んでいる。自分の未来の子供に向けて絵本を製作するが、コンクールのテーマに沿った絵本を毎年応募している。

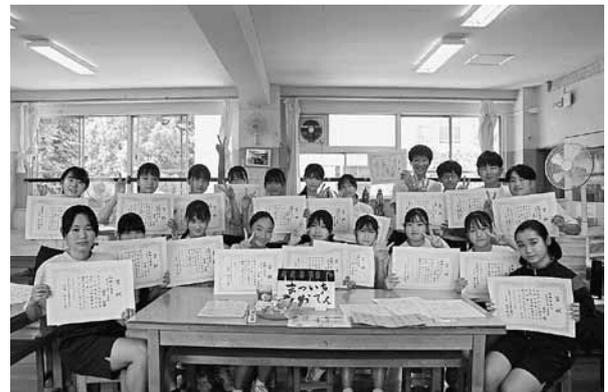
#### (4)創造ものづくり教育フェア

##### 「豊かな生活を創るアイデアバッグコンクール」

1年生で「布を用いた作品作り」でコンクールに取り組める生徒に声掛けし、生徒と家庭と家庭科教諭で連携しながらコンクールと一緒に取り組む。

#### (5)家庭科・技術家庭科作品展

授業中での作品製作だけでは物足りず、更に作品作りに取り組みたい生徒たちが力を合わせて3学年一緒の作品を作り、作品審査会に進めるようにブラッシュアップする。これらの取組は様々な場面で学校職員がチームとなって協力してくれているから成り立っているものである。学校職員がチームとなって協力し生徒たちの輝ける機会を増やす取組をこれからも更に増やし、家庭科の重要性を高めていきたい。





# 一人一人が深い学びを具現化し、 わかる・できる喜びを味わう体育学習 ～学びの系統性をとらえ、自己実現できる学習を通して～

船橋市立行田中学校教諭 つげ はると 柘植 晴登



## 1 はじめに

船橋市の保健体育科の学習においては「機能的特性を重視しためあて学習」を推進し、市内全体で主体的、対話的で深い学びの実現に向けた授業実践に取り組んでいる。「機能的特性に触れさせる」という点においては、その運動の楽しさに触れさせれば良いという、楽しいだけで学びのない授業になりがち傾向がある。子供たちが単に活動していることで、意欲的に学習しているという錯覚にも陥りやすい。そこで船橋市では、めあて学習（課題解決型学習）をもとに、その運動の楽しさを追求する中で、発達段階に応じた「わかる、できる楽しさ」を見童生徒に味わわせることができる学びの実現を目指して努力している。

本校の研究主題「一人一人が深い学びを具現化し、わかる・できる喜びを味わう体育学習～学びの系統性をとらえ、自己実現できる学習を通して～」は、「自ら学び、豊かな心をもって、たくましく生きる生徒の育成」を踏まえ、前述した船橋市における保健体育科における学びの実現を目指して設定した。以下は、この研究主題をもとに取り組んできた内容の一端である。

## 2 研究仮説

主題達成に向けて、授業を行う中で三つの研究仮説を立て授業を行った。

【仮説1】単元の系統性を理解させるとともに、ねらいを明確にし、学びの見通しをもたせることができれば、自己に応じた学習を

実現することができるだろう。

【仮説2】生徒の実態に合った運動や活動を選択すれば、わかる・できる喜びを味わうことができるだろう。

【仮説3】生徒主体の活動を保障し、学びを促進させる発問や声かけをすれば、深い学びを具現化できるだろう。

## 3 研究の実際

仮説1について、今年度行った3年生の陸上競技ハードル走の授業では、学習指導要領解説の例示に基づき、単元のねらいを「スピードを維持した走りで、素早くハードルを越えて記録に挑戦しよう」とした。これは、1・2学年の既習内容（学習指導要領解説 例示）を想起させつつ、さらにタイムを短縮するため、3学年の内容である低く走り越すことに生徒が着目できるよう設定したものである。

仮説2について、生徒が「何を」「どこまで」理解していて、「どのように感じているか」把握するために、3学年球技ハンドボールの授業では「ゲーム中、味方からパスをもらうために一番大切なことはなんですか?」、「ゴール型の授業において、難しいと感じるときはどのようなときですか?」といった記述式のアンケートを用いてこれまでの学びの状況を把握した。その結果から、自然とゲーム展開が速くなるようコートサイズを狭めた。また、オフザボールの動きを増やし空間をめぐる攻防を行いやすくするために「一度のボール保持につきドリブル1回」というルールで行い、

生徒がハンドボールの機能的特性に触れられるよう授業を行った。

仮説3について、自ら課題を設定して、その課題解決を通して学びを深めていけるよう、毎時間生徒の気づきを技能のポイントごとに模造紙にまとめ、学びの積み重ねを視覚化できるように取り組んだ。また、生徒の気づきを促すために、集団競技では毎時間、個人競技では課題に応じて単元開始前に発問計画を作成し、意図的に学びが深まるよう授業を行った。

生徒が学習を進めていく中で、つまずくポイントを事前に予測し、教師の発問を通して、考える視点や運動観察を行う視点を焦点化させる。この積み重ねにより生徒自身の、気づきを促し「わかった」「できた」を経験させる。このことが生徒主体の授業に結び付くと考え授業を創造している。

#### 4 実践の成果

深い学びを具現化し、わかる・できる喜びを味わう学習を実現するためには、生徒自身が得た知識を活用し、自己やチームの課題を達成していく過程を通して、具体的に下記の内容が大切なことであると分かった。

**(1)生徒に「何を」「どこまで」学ばせるかという、ゴールイメージを教師側が持つこと。併せて生徒に持たせること。**

単元や学年ごとに「何を」「いつまでに」学ばせるかという、身につけさせたい内容を整理し、教科部会で共有し、3年間を見通した学習計画と指導が大切であることが分かった。

**(2)生徒主体の学習を教師側が仕組むこと。**

単に知識や技術を伝達するのではなく、生徒自身の「学び」を重視するため、ねらいに沿った気づきを促せるような場の工夫（コートを狭める・ルールの制限）をすることや「自らの課題解決」に必要な教具の充実、活

動時間の確保が重要である。また、学ばせるために、学習資料を用いて「気づかせる」ことが大切であり、生徒に「資料を活用する習慣」を身につけさせるとともに、資料の内容については「文字は少なく」「見る視点を明確にした」資料を作成することで「わかった」「できた」という経験を増やすことができると感じた。

**(3)課題に対する気づきを促す発問をすること。**

発問内容については、改善策を考えさせる発問（どうしたらいいかな？）と、答えを先に教え、なぜそれが良いのかと考えさせる発問（なぜこうするといいいと思う？）といった発問を使い分け授業を行うことが大切である。そのために、生徒のつまずきを予想した発問計画を立て、生徒の気づきを促す引き出しを教師側がいくつも持っていなければいけないことに気づいた。

**(4)知識・技能だけではなく学びの実態についても把握すること。**

事前アンケートの内容を検討する中で、「前年度までの既習の内容（学習指導要領解説例示）をどれだけ身につけているか（知識・技能）」「めあて学習や教え合いがどれだけ身につけているか（思考・判断・表現）」「各種目の学習の阻害要因」「どのようなことを学びたいか」といったことを明らかにできるよう質問内容に改善を加えた。生徒の実態を具体的に把握することで、実態に応じた学びを選択することに役立った。

#### 5 おわりに

今後もめあて学習をもとに、発達段階に応じた「わかる、できる楽しさ」を児童生徒に味わわせることができる学びの実現を目指して、これまでの成果に工夫・改善を加えていこうと思う。



## 生徒主体の生徒会活動を目指して



県立安房高等学校教諭 えんや 塩谷 こうすけ 康介

### 1 はじめに

安房高校は明治34年に創立し、120余年の歴史を持つ伝統校である。その間、平成20年に千葉県立安房南高等学校と統合し、現在に至っている。平成19年に県教育委員会から進学指導重点校に指定され、単位制の導入による選択科目の充実や特別進学クラスの設置、習熟度別授業や少人数指導の導入等、学習指導や進路指導に力を入れている。校訓は「質実剛健 文武両道」であり、学習面のみならず課外活動においても多くの生徒が様々な場面で活躍しており、特に、陸上競技部、柔道部、剣道部、水泳部、ソフトテニス部は、全国大会や関東大会に出場する活躍を見せている。私は本校5年目、生徒会担当教員として生徒会活動の支援に取り組んでいる。取り組みの中で生徒に伝えていることや意識していることを述べたいと思う。

### 2 生徒会担当教員として

私が生徒会活動を支援する上で大切にしていることは、「自主自律」した生徒を育てるという視点である。生徒の主体性を育むため、活動状況をよく見極め、安全面に配慮しながら生徒を信頼して、活動の内容や方法を任せられている。学習指導要領でも「生徒会活動は、全校の生徒をもって組織する生徒会において、学校における自分たちの生活の充実・発展や学校生活の改善・向上を目指すために、生徒の立場から自発的、自治的に行われる活動である」とされている。

しかし、実際には教員が主導して様々な活動の準備をしたり、事前に関係する先生方と調整したりということが多く。私はそれを大人主導の生徒会活動と呼んで改善に取り組んでいる。多忙な業務の中、教員が主導して進めた方が、早くて失敗も少ないが、それでは生徒会活動をする意味がなくなってしまう。大人主導の生徒会活動から生徒主体の生徒会活動とするにはどう支援すべきか常に考えている。



生徒会活動の様子

### 3 意味のあるひと手間

生徒主体の生徒会活動の中で、生徒は多くの失敗を経験する。活動の振り返りを行うと計画が不十分だった、連絡、調整、配慮が足りなかったなどと生徒は語る。しかし、そこが学びのチャンスであると私は考える。その失敗はどうすれば起こらなかったのか、どうすれば防げたのかなどを生徒個人で、あるいは生徒会全体で考え、話し合う。今年度の失敗が来年度は改善されるように生徒会役員は

次の役員への引継ぎ書類を作成している。生徒は自分たちで失敗を経験した分、自分たちの手でしっかりと改善を行い、徐々に活動が良くなっていく。私は、今年の活動がうまくいくかということよりも、長い目で見てより良い生徒会活動になるように意味のあるひと手間を辛抱強く待つことを心掛けている。改善はサイクルとなり、生徒会だけでなく学校の文化として定着していくと私は考えている。

#### 4 生徒が安全に失敗を経験できるように

生徒主体の活動にするための試行錯誤の期間は教員側の手がかかって大変である。しかし、長い目で見れば、生徒主体の活動によって教員側の負担が減っていくことは明らかだ。そんな理想的な形になるまで生徒を支援していきたい。昨年は大変だったことが、今年は何事もなくスムーズに進んでいくと、生徒会組織や生徒個人の成長を感じられる。

#### 5 エージェントを持った生徒

9月ごろになると生徒会役員が改選され、新しい役員による生徒会が発足する。生徒間での引継ぎはあるが、最初から主体的な生徒会活動を計画や運営することは難しい。そこで私は、最初の集まりで、「エージェント」について生徒会役員に伝えている。OECD Education2030ラーニングコンパスでも中心的な概念としてエージェントについて述べられている。エージェントとは、「変化を起こすために自分で目標を設定し、振り返り、責任をもって行動する能力」と定義されている。私の中の自主自律した生徒という目標を具体的な行動や能力として整理して生徒に伝えるときに役立っている。

#### 6 生徒主体は生徒任せではない

VUCAの時代でエージェントが求められている中、これまで生徒会の生徒でさえ自分が所属する学校のことを自分たちでは変えられないと感じていた。しかし、スクールポリシーの作成に際して、自分たちの学校について改めて考える機会をつくったり、校則の見直しを求めて全校生徒の意見をまとめたりする活動をしていく中で、生徒は、少しずつ自分たちで何かを変えていくことができるのだという当事者意識を自分の中に芽生えさせた。主体的な生徒会活動につながる大きな一歩であると感じている。

生徒主体は生徒任せではない。生徒会活動を活性化し、その教育的な価値を高めていくためには、生徒に求める方向性や目標をしっかりと示すなど教師の適切な指導が必要であると私は考える。



リーダー研修会の様子

#### 7 おわりに

生徒会担当教員として、生徒会活動を支援していくことは、大変やりがいのあることである。先生方や生徒から先生のおかげでと言ってもらえるのはありがたいことではあるが、本当は大村はま先生の言うところの「仏様の指」のようでありたい。これからも生徒会活動が活発になるように生徒を支援し、共に学び続けていきたい。



## 子供が見えない所を伝える

白子町立白瀬小学校教諭 のむら けいご 野村 恵伍



初任者の私は、目の前の活動や行事をただ滞りなく進めることに、手一杯だった。しかし、運動会の応援団担当となった2年目。子供の成長を促す教師の指導の在り方について大きな学びがあった。それは諸先輩方が教育活動の前に子供に活動の目的を尋ね、活動中は他者に目を向ける声掛けをしていたことだ。「なぜ運動会をするのだろうか。」「この頑張りか、この先のここにつながるよ。」そんな声掛けを受けた子供は、主体的に活動していた。「暑いから、〇〇先生がテントを立ててくれたよ。」と伝えることにより感謝の気持ちも、自然と行動に表れた。子供が見えない所を工夫して声掛けをすることで、子供の成長度合いに大きな変化があると感じた。この指導の仕方を意識して、応援団指導を行った。運動会当日、充実感に溢れた子供の姿を見ることができた経験は、私にとって大きな転機だった。

昨年度、2年生担任時「用務員さんが芝を刈ってくれて、体育が気持ちよく出来そうだね。」と話をした。子供は用務員を探して、お礼を言いに行ったそうだ。低学年でも発達段階や実態に合わせて、声掛けをすることで、自主的に考えて行動に移すことができる。自分自身も学んだ瞬間であった。小さなことでも声を掛け、考える時間を設けて次の活動に進む。この繰り返しは伸びにつながると考える。今後も子供が自主的に考えて行動できるような声掛けをしたい。そして、諸先輩方が私に与えてくれた影響を今度は自分が与えられるよう、精進していきたい。



## 「発信する力」の育成を目指して

印西市立船穂中学校教諭 かみじま なおや 上島 直也



「国語の授業、つまらない。」これは私が教壇に立ち始めた頃に生徒から言われた言葉である。教員1年目の私は、少しでも生徒たちに知識を詰め込ませようと必死だった。今思い返せば当時の私の授業では、生徒たちは解説を聞き、黒板の文字をノートに写すばかりであった。その結果、このような言葉を言い放たれたのであろう。

自分の授業に自信が持てない中、学習指導要領が改訂された。その中で「主体的・対話的で深い学び」という言葉が私の心に響いた。生徒たちの主体性…。ここで、ようやく私は「自分の知識や経験を基に、言葉を吟味して相手に伝える力」いわゆる「発信する力」が今の生徒に必要なのではないかと考えた。果たして、私の授業でこの「発信する力」が本当に磨かれていたのだろうか。そう自問自答をしてからは「どうしたら生徒が応えなくなるか。協議したくなるか。」を常に考えながら教材研究に臨んだ。考え、協議し、もう一度考える。そして発信する。国語の時間は生徒たちの声が飛び交うように変わってきた。

教員生活も今年で6年目になる。教員の仕事は多岐にわたるが、私はやはり「教科指導」に力を入れていきたい。国語科は言語活動の中枢を担わなければならない大切な役割だと自負している。生徒たちが自らの仕事に誇りと責任を持ち、多様に移り変わる時代を「発信する力」を用いて生き抜けるように、これからも向上心を持って職務に励みたい。